

映像メディア領域

19世紀半ばに誕生した写真術は、当時の最新テクノロジーを基礎としながら、現実を科学的に記録するメディアに留まらず、新しい芸術表現の地平を開拓するメディアとしても発達してきました。同世紀末に写真術から映画が派生した後も、20世紀をまたいでTVやビデオアート、CGなど、映像メディアはその領域を広げながら、現在のコンテンツ産業の中核を形成するに至りました。こうした映像メディアの歴史は、写真の専門教育機関として出発した東京工芸大学の歩みと軌を一にしています。本大学院芸術学研究科の映像メディア領域では、伝統ある教育システムを受け継ぎつつも、新たに興隆してきたカルチュラル・スタディーズや表象文化論などの成果を取り入れ、21世紀の社会に向かい合った学問体系の再構築を目指します。

教員の紹介

Professor Introduction



児玉高志
教授

【専門分野】
映画制作
シナリオ制作
【担当科目】
映画制作特論
映画制作特論演習
映像学特別研究

研究テーマ ● 映画制作

劇映画の制作を研究しています。19世紀末に発明された映画は、20世紀を通して単なる庶民的な娯楽から、様々な文化的諸相にまで影響を及ぼし、戦争の「武器」となり、社会や文化を動かす巨大な存在になりました。その映画を巨視的には文化的、産業的な視点から検証し、微視的な視点では自己に内在するテーマを、いかに映画・映像に定着させるかを研究します。

メッセージ ● 表現者にとって大切なことは、ハード(どうやって)ではなくソフト(何を?)だと思えます。何を表現するか、それは自分自身を見つめることであり、自分を取り巻く世界を探求することです。「人間力を磨く」…私はこんな言葉が好きです。



西村安弘
教授

【専門分野】
映画理論
映画史
【担当科目】
映像表現特論演習
映像学特別研究

研究テーマ ● 映画理論及び映画史

国民国家の形成と映画の関係を特にイタリア映画に注目しながら、研究を進めています。

メッセージ ● 大学院で映像制作を学ぶことは、現場で映像制作を体験的に会得することとは、自ずから弁別されるべきであろう。理論をベースにした作品制作に当たって欲しい。



大津はつね
教授

【専門分野】
ビデオ・アート
メディア・アート
パフォーマンス
【担当科目】
映像造形特論演習
映像学特別研究

研究テーマ ● 映像造形

実験映像、映像詩、ビデオアート、メディア・アート作品の制作またパフォーマンスなどの身体表現、映像芸術を研究しています。

メッセージ ● 作品制作をするのに、様々なアイデアやイメージを頭の中で思考するだけではなく、実際に手を動かすこと、つまり身体を動かして行動を伴った考えを持つことが大切である。そうすることで、創作行為は試行錯誤と実験の連続であることを理解するだろう。こうした経験を積み重ねることを指導の方針としている。



山川直人
教授

【専門分野】
映像制作
【担当科目】
ビデオ制作特論
ビデオ制作特論演習
映像学特別研究

研究テーマ ● 映像制作

映画、テレビ等で見られるあらゆる映像の制作実態分析と、より質の高い作品を生み出すための制作形態を研究し、試行し、改良していきます。

メッセージ ● 映画、テレビ等で見られる映像、そしてアート作品も含めて、今やほとんどデジタルカメラで撮影され、パソコンソフトで仕上げられるようになりました。安く簡単に素晴らしい映像ができるようになったのは良いことですが、粗製乱造的な傾向も見られます。映画、ドラマ、CM等、本来のそれぞれの分野が持つ制作的、作品的な長を生かしつつ、メディアとしての更なる質の向上を目指したいと思えます。



高山隆一
准教授

【専門分野】
映画史
映画教育
【担当科目】
映像表現特論
映像学特別研究

研究テーマ ● デジタル・シネマ

過去の名作としての日本映画ではなく、現在の日本映画を観ています。イメージとしてではなく、実際に目で確かめてから語る姿勢を持ちたいと考えています。今でしか語れない日本映画もあるはず。小津、黒澤以外の日本映画を語りたいと考えています。もう一つの研究課題は、映画教育の方法論です。映画学校のカリキュラムや教材について、外国の映画制作の入門書、他芸術の教育方法との比較を少しずつ調べています。

メッセージ ● ややもすると持って生まれた「才能」や「感性」で片付けられてしまう芸術の世界。しかし、レッスンや効果的なカリキュラムやメソッドによりそれらが育まれていくのも事実である。映像という新しい分野におけるこのような効果的な教育の方法論は如何にあるべきかを常に考えていきたい。映像理論の解釈というデスクワークを通して、映像制作フィールドワークへの完成を試みて欲しい。



李 容旭
准教授

【専門分野】
映像メディアと表現論
映像アート制作
デジタル映像制作
【担当科目】
映像造形特論
映像学特別研究

研究テーマ ● 映像アート、デジタル映像

映像表現は様々なメディアの絡み合いで生まれました。デジタル環境はそのようなそれぞれのメディアが持つ特性の共通基盤になりつつあります。では、デジタル環境、コンピュータ時代において、映像表現の可能性はどこにあるのでしょうか？理論と制作の両方から模索します。

メッセージ ● 映像はアート表現の重要なツールとなりました。アート表現としての映像の過去、現在、未来を与える、その創造の現場へようこそ！

本領域で育てる人材

diploma policy

デジタル技術の本格的導入によって、映像メディアを取り巻く環境の進展は著しく、大学院の教育・研究活動においても、伝統的な学問を継承するのみならず、学際的な視野からのその再構築が要請されています。本大学院芸術学研究科の映像メディア領域では、コンテンツ産業の中核を担う映像クリエイター(監督、プロデューサー、シナリオライターなど)や表象文化全般に関わる専門的な研究者(大学教授、学芸員など)の養成に加えて、マスメディアや広告業界などでも企画・立案能力を発揮できるような人材育成を目指します。とりわけ、海外からの留学生も積極的に受け入れることで、横断的・国際的なネットワークの中で主体的に情報を発信する基地となることを望みます。

教育内容

curriculum policy

映像制作の経験豊かなプロフェッショナルと映像研究・教育の専門家とコラボレーションしながら、最先端の制作環境の中での実習と理論的・歴史的ゼミナールの2本立てによって、映画、TV、ドキュメンタリー、CG、メディア・アート等の各専門分野の深化を図ります。また、映像メディアのリテラシー能力を高めながら、隣接する他メディアとの総合化も視野に入れながら、常に時代の潮流の中で社会をリードすることのできる幅広い知性を涵養します。

映像メディア領域授業科目一覧 (H23年度開講科目予定)

映像表現特論	高山隆一	制作において理論とは決して机上の空論ではありません。本講義では映画理論の先端を考察することにより、より高度な制作の概念を高めていくことを目的とします。
映画制作特論	児玉高志	20世紀は、『映像の世紀』であったと言われていました。映画の発明者の一人、リュミエールをして「この発明に未来はない」と言わしめた映画、映像メディアが、単なる庶民的な娯楽から、様々な文化的諸相にまで影響を及ぼし、戦争の「武器」となり、20世紀の社会や文化を動かす巨大な存在になったのです。本講義では、そうした20世紀の映画、特に世界中にアメリカ的な文化や価値観を押し広げたアメリカ映画や、私たち日本人が意識的、無意識的にその時代時代に作り上げてきた日本映画を中心に、歴史的、社会的、また大衆文化論的な観点から、映画の創られ方、映画のあり方、映画の観方を検証していきます。
テレビ制作特論	江川隆二	テレビ番組の制作全般の流れを復習するとともに、放送された番組の一部を出発点に、業界で求められるレベル、面白さを考えます。
ビデオ制作特論	山川直人	映像制作の現状分析と解説をします。
映像造形特論	李 容旭	タイムベースのアートを通史的切り口から作家、作品を中心に講じます。
映像表現特論演習	西村安弘	修士論文執筆の準備段階として、ユーロ・ホラーに関する基本的な英語文献を読み進めます。
映画制作特論演習	児玉高志	映画を制作する原点は、自己に内在するテーマです。テーマをモチーフと結びつけて醸成させ、それを具体化したものがシナリオとなります。テーマをいかに言語化・構成化させ得るか、それをどう映像に定着させるか、そこに映画創りの楽しさも難しさもあると言えます。この演習では、名作映画を検証しながら、テーマの捉え方、シナリオの構成、映像テクニック等を確認していきます。そうした中からその名作映画の「秘密」を解明していくことを目的とします。
テレビ制作特論演習	江川隆二	各自の問題意識を出発点に狙いを明確にした後、撮影に入ります。毎週の撮影進捗状況に合わせ、演出方法を検討、仕上げていきます。
ビデオ制作特論演習	山川直人	実際の映像制作に沿った表現手法の解説をします。
映像造形特論演習	大津はつね	本演習では、各自の研究目標に基づいて映像造形表現の可能性を踏まえ試作を行い、各自の表現の習熟度を高めることを目標とします。
映像学特別研究	児玉・西村・大津・山川・高山・李	「修士研究」に向けての準備をします。映像領域の教員ごとに異なった内容で研究が行われます。詳細は、修士1年次のガイダンス時に説明します。

※所属する研究領域において開講されている科目です。

Imaging Art Media

博士前期
課程